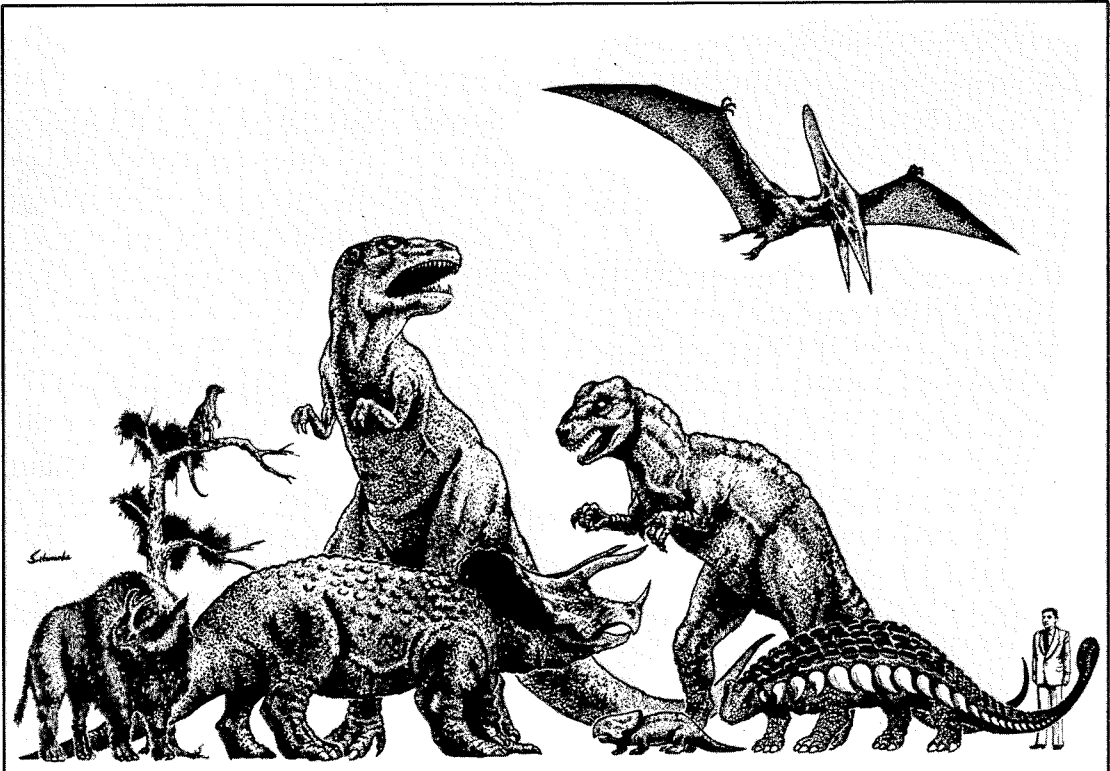


# あるむぜお

府中市郷土の森だより

No. 3

al museo



メガセロプス	ヒプシロフォドン	ティラノサウルス	トリケラトプス	プロテラドン	メガロサウルス	プロテラトプス	アンキロサウルス	ヒト
--------	----------	----------	---------	--------	---------	---------	----------	----

## 特別展

共催 国立科学博物館  
後援 東京都教育委員会

恐竜絶滅と隕石衝突の影響

## 白亜紀展

3月20日(日)～5月8日(日)

大宇宙に我々の母なる惑星“地球”が誕生してから今日まで46億年という時間が経過しました。この長い歴史の中で今からおよそ6500万年前、白亜紀末に想像を絶する一大惨事が生じたといわれています。それが恐竜の大量死滅です。

人類が初めて地球に登場するはるか昔、恐竜の仲間は我が物顔で陸・海・空のあらゆる生態環境に君臨していました。その種族の存続時間

は、まだわずか 300万年程でしかない人類に比べると、約60倍もの長さです。生物界の王者として長く生き続けた恐竜が、急激に地球上から姿を消してしまった事実は、地球科学上、古生物学上の大きな疑問のひとつになっており、現在でも種々の学説があります。

その中でも最近特にクローズアップされてきたのが巨大隕石衝突説です。この説は白亜紀の地層と第三紀の地層の境にある黒土層の発見に端を発します。これは、イタリア中央部を走るアペニン山脈に囲まれたペルージャ州グビオ近郊で初めて見出され、現在では世界各地30か所程で同様のものが確認されています。また、日本でも北海道十勝川支流域で発見されました。この黒土層を境界として、上部の地層が第三紀、下部の地層が白亜紀と判別できるのは、発掘された浮遊性有孔虫の化石が、下層から出土したものは白亜紀に生息した種類、上層のものは第三紀に生息した種類、とはっきり分かれているからです。

そしてこの黒土層には、イリジウム、オスミウムといった元素が大量に含まれていました。これらは密度の大きい非常に重い金属で、本来ならば地表部にあるのは極めて稀なことです。というのは、これらは宇宙起源の元素で、それを含む宇宙塵が凝集して星を誕生させる際には、重いために星の中心部に取り込まれてしまうは

ずだからです。

ではどうして、二つの元素が地表部に残っているのでしょうか。地球外物質として地球にもたらされたのではないのでしょうか。これらの元素を含んだ宇宙塵が星をつくりそこねたもの同志集まり、隕石として地球に落下した、それもありかなり大規模なものが衝突したのではないが、というのが巨大隕石衝突説の根拠です。そしてその年代は、イリジウムを含んだ黒土層の直下部=白亜紀末、つまり恐竜が絶滅した時代、というわけです。

巨大隕石が地球に衝突すれば、その衝撃や爆発力はもちろん、巻き上げる粉塵による影響も大きく、上空は完全に暗黒大気におおわれてしまいます。太陽光線の届かなくなった地上では、生物も当然その生命存続の術を失ってしまったことでしょう。

こうして、恐竜絶滅の謎を解く物的証拠として、黒土層の存在はかなり大きなものになりました。今回の展示では、隕石衝突による恐竜絶滅のストーリーを、白亜紀に生息した恐竜の化石をはじめ隕石の数々、そして絶滅の証人黒土層などによって紹介します。太古のロマンに浸り、もう一度宇宙と生命の進化に関わる偶然性を認識してみましよう。また、同時にプラネタリウムでは映像によってこの謎に迫ります。併せてご覧ください。

## ❖ 同 時 開 催 ❖

### プラネタリウム

「春の星座・消えた恐竜の謎」

### 映画会

期間中の土曜日 正午～

「地球誕生」「恐竜の時代」

「アースオデッセイ号の冒険 関東創生記」

特 別 展 図 録 ￥1,000

オレンジカード ￥800

### 記念講演会

博物館本館大会議室 2時～

4月3日(日)「地球46億年の旅」

東京大学教授 濱田隆士氏

4月17日(日)「白亜紀の恐竜」

国立科学博物館 小島郁生氏  
地学 研究 部長

4月24日(日)「隕石のはなし」

国立科学博物館 村山定男氏  
理化学 研究 部長

## 旧河内家住宅

郷土の森には茅葺き農家が2棟復原されています。今回は旧河内家住宅を紹介します。

旧河内家住宅の創建は18世紀後半といえますから、江戸後期のことです。もとは旧大沢村（現三鷹市）にあったものですが、天保15年に旧人見村（現府中市若松町）に移築され、昭和58年まで人見街道に沿った南側に建っていました。

茅葺きからトタン葺き、それから瓦葺きに、土壁から障子、そしてアルミサッシにと、民家は時代とともに変遷しますが、民家の本当の美しさは、長い間民衆のなかにあって少しづつ洗練されてきたところにあります。作為的なデザインではなく、実用的で飾りのない民家のたたずまいは、人々の暮らしに深く根付いているものでしょうし、それだけに人の心を打つものです。

郷土の森にお越しください。そして旧河内家住宅をご覧ください。まず屋根の上に「あれは何だろう」という興味が起こります。あれは、オカイコのための空気孔なのです。この家は、実は創建当初の姿ではなく、明治末期の形に復原しています。この頃は、府中で最も養蚕が盛んだった時代です。養蚕のための改造はこれだけではありません。当初の竹簀子天井に一段低く

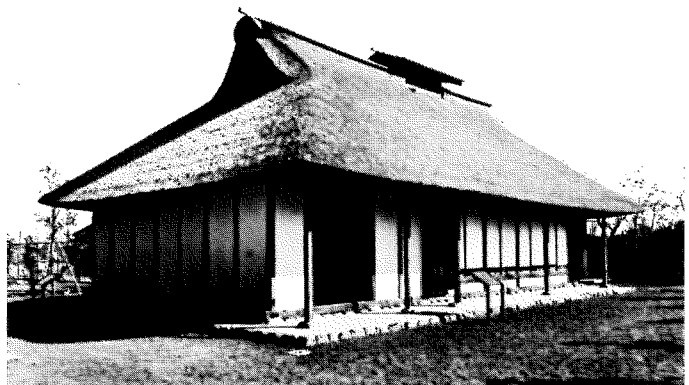
板簀子天井が張られていて、ムシロが敷いてあります。また、ザシキ、デイには畳をあげると床に炉が切っただけです。これらは保温のための改造です。右側の障子戸の上にはシシマドと呼ばれる格子窓がとりつけてあり、取りはずしができます。これは通風性をよくするための改造です。保温と通風性、これは養蚕のための必須条件です。

市内のかつての養蚕農家の方々に話をききますと、カイコを大切に扱っていたことがよくわかります。それは何よりカイコのことをオコサマと呼ぶ例でよくわかります。自分の子どものように大事にして、神仏に頼ることも多かったようです。それは当時の農家にとって養蚕が貴重な現金収入でもあったからなのです。

先日のこと、旧河内家のイロリで火をおこしている時「おじさん何やってんの？」と小学生。「炭をおこしているんだよ」「？？」炭火を火鉢に移してやり「手をあててごらん」「わーあったかいや」……………。

私たち郷土の森は、こういうふれあいを大切にしたいと思います。そういう場所として旧河内家住宅は、うってつけの場の一つとなることでしょう。(G)

旧所在地 府中市若松町4-21  
解 体 昭和58年9月  
復 原 昭和61年12月  
構 造 木造平屋建茅葺き  
延 面 積 87.54㎡  
設計・監理 早稲田大学建築史研究室  
(代表)渡辺保忠  
施 工 侑田中木工



# 江戸時代の社寺の勸化

遠藤 吉次

## 修復・造営と勸化

神社・寺院にとって、その宏大な社殿・堂宇の維持管理は社寺経営の最大の課題であり、その修復や造営に莫大の費用を要するのは今も昔も変わりません。

江戸幕府は、その初期においては主要社寺の造営・修復を自らの手で行う等手厚い保護を加えましたが、中期以降は財政悪化のため、ごく一部の徳川家ゆかりの社寺を除き次第に助成は手薄となり、下賜金等も行われなくなりました。

そのため由緒ある社寺においても造営や修復の費用は自ら捻出せざるを得なくなり、さまざまな資金調達の方法がとられましたが、代表的なものは次のようなものでした。①社寺名目金といい修復等を名目として自己資金あるいは寄付金を元手に金融をして利殖を図り資金をつくる方法。②富突（富籤）すなわち現在の宝くじのようなものを行いギャンブル収入を図る方法。③開帳といい本尊や宝物を公開して多勢の人々を集め賽銭や出店の場所代を得る方法。そして④勸化といい各地を巡行配札して多くの人々から寄付を募る方法です。

これらのうち、①ないし①に類する金融行為は、いずれの社寺においても程度の差こそあれ通常的に行われていたようであるのでこれを除外すると、当時もっともポピュラーな方法は④の勸化でありました。

勸化にも種類があり、幕府の寺社奉行全員の連判によって許可された御免勸化と、寺社奉行一人の判のみによって許可された相対勸化とがありました。勸化は本来は個人の信仰心からの自発的な寄付を募るものですが、幕府公認の勸化となりますと半ば強制的に名主等を通じて寄付を強いるという性格になり、とくに御免勸化はその性格が強いものでした。このほか、とくに幕府等公権力の許可をとらない私的な私勸化もあり、これは随時各社寺で行われていました。

## 六所宮の勸化

さて、府中の六所宮（現大国魂神社）においても江戸時代を通じてしばしば造営・修復が行われましたが、慶長11年（1606）と寛文7年（1667）に竣工した造営は、それぞれ大久保石見守長安・久世大和守広之を奉行として、いずれも幕府の手で行われました。しかしそれ以後の修復については幕府は祝金程度の助成しか与えず、代りに勸化を許可することにより神社自身の手で寄付を募り普請の費用に充てさせました。

六所宮の修復のための勸化は、享保・天明・天保・嘉永の4度行われました。このうち享保期のものは武蔵一国の相対勸化だったようで、期間ははっきりしません。次の天明期の勸化は武蔵・上野・常陸、天保期のは武蔵・上総・常陸、嘉永期のは下総・下野・信濃のそれぞれ3か国3か年間の御免勸化でした。

当時、3か国勸化といっても、その社寺の神職・役僧が実際に巡行したのは主として近郷だけであり、遠方の地域はセミプロの勸化人の請負制でした。六所宮の場合も同様で、天保12年から15年にかけての3か国勸化では、上総・常陸の両国と武蔵国の北部13郡は河合・松山・並川なる3名の者に請負わせており、神主等が実際に巡行勸化したのは多摩郡を中心とする武蔵の南部9郡だけでした。

六所宮の勸化は、享保・天明・天保と、あいにく江戸期の三大飢饉の時期にぶつかってしまったこともあり、思うように勸物は集まらず、修復も難行したようです。

## さまざまな社寺の廻村

江戸時代、幕府が御免勸化を許可した社寺の数は膨大なもので、御触書集成に記録されているものだけでも、享保7年（1722）から天保7年（1836）までの間にのべ250社寺にのぼっており、これに相対勸化や私勸化等を加えると、実際にはこの5倍～6倍にものぼるものと思われます。

では実際にこうした勸化やそれに類する配札等がどの位府中周辺の村々に廻ってきたかを、幕末の安政4年(1857)の本宿村(府中市西部)の村入用帳によってみると次のとおりです。

三州広忠寺御免勸化初尾(300文)  
出雲大社七ヶ年勸化皆済相渡分(金1朱200文)  
遠州浜松諏訪大明神御免配札初尾(200文)  
甲府武田八幡宮勸化(200文)  
奥州塩釜明神勸化(200文)  
香取大神宮灯籠勸化其他(200文)  
遠州光明寺御免配札勸物(200文)  
太田姫稻荷御免配札初尾(300文)  
本所五百羅漢御免勸化(金2朱)  
麴町山王宮御免勸化(金1朱)

このように御免勸化だけでも10件あり、さらに伊勢両宮一万度配札初尾・阿岐留神社配札初尾・一之宮明神配札初尾・大山御師泊井昼食代・愛宕山御師泊入用・大嶽御師入用井昼食代・富士御師泊り入用・鹿島大神宮一万度御祓初尾・津島御師入用・愛宕山火防初穂といった配札初穂や御師の檀廻りの宿泊入用等が同じ件数だけ書留められています。

こうした本来自主的な寄進であるべきものが村入用として村の会計から支出されていることは、この種の勸化が強制的な負担として認識されていたことがわかります。なお、お隣りの国分寺市の戸倉新田の嘉永5年(1852)の勸化覚帳にも、常陸普門寺・亀ヶ岡八幡・長淵郷玉川明神・石清水・駿州中之郷・三州山中八幡・本郷・相州吉野・水天狗朝日明神・鷲の宮の10件がみえますが、勸化が、浪人や虚無僧・座頭・ござ等の物乞いと一緒に取扱われているのが注目されます。

六所宮の神領府中八幡宿でも安政4年の1か年にやはり10件の勸化廻村が記録されていますが、それをみますと、すでに勸化年限が切れ、勸物が納め終っているにもかかわらず素知らぬ顔で廻村し新たな勸物を強要する強欲な勸化請負人もあったようで、村としても、戸別の配札の拒否、村役人宅への宿泊拒否、勸物の皆済にあたっては必ず領収書をもらう等の断固とした対応をしています。

## — 最近の発掘調査から —

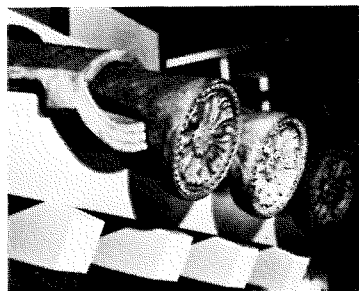
皆さんご存じですか、わが街府中と呼んでいる人たちが、東京と広島だけでなく、もっとたくさんいることを。

つまり、府中市は確かにこの2市だけですが、府中町・府中村と言うのが数町村ありますし、字名の中にもいくつかあるからです。

では、このように全国にいくつか見られる「府中」と言うのはどういう意味を持つものでしょうか。「府中」は、文字で見ると「府」の中と書きます。この「府」とはすなわち、奈良時代ごろに全国の国(武蔵もこの国のひとつ)に設けられた国府を表すものと考えられ、「府」の中つまり「国府」の中というわけです。

このことから「府中」と呼ばれる街は、それぞれの地方を治めていた国府の跡(=国府の遺跡)上にある街と言え、その地方でも中心的な遺跡が眠っている街と言えるのです。

もちろん東京都府中市も、この一つで、当時は東京・埼玉、そして神奈川の一部を治めていたわけですから、今でいうと県庁所在地だったわけです。そして今回この中でも当時の県庁舎(国衙と呼ばれています)の一部と考えられる部分を調査する機会がありました。ただ、残念ながら県庁舎の中の知事室(国庁と呼ばれ、国衙の中でもその最も中心と言える建物群のこと)ではなかったようです。しかし、ここからは武蔵の行政を支える役所の一部と思われる大型の建物群の跡が多数見いだされ、もう一箇所の調査地区からは多量の瓦が見つかりました。そしてその中にはこれらの建物群の軒先を飾った文様がついた瓦も混じっていたのですが、そ



朱塗り垂木と葺の復原(博物館展示室より)

の軒先を飾った瓦の一つから、建物の柱を赤く塗る（昔の立派な建物は高幡不動の塔のように、白壁に朱塗り柱、そして黒々とした葺が特徴でした）際にはみ出して付いてしまった赤い塗料

が付いたものが見つかりました。

やはり府中にもあったのです、荘厳な建物が。瓦を葺き、柱を朱色に塗った……（八幡町牛丸ビル地区・高橋宅地区の調査から 荒井）

### 博物館入門講座 その3

## 博物館の活動 ～学芸員の仕事～(2)

博物館のおもな仕事は、調査研究、資料収集、資料整理・保管、教育普及活動の4つからなりたっています。この4つの活動が相互に円滑にはたらかなければ、博物館は機能しません。

前回は、これらの活動のうち、調査研究、資料収集、資料整理・保管について簡単にお話しました。今回は残る教育普及活動を中心にお話することにします。

#### —— 教育普及活動 ——

教育普及活動は、博物館の最終目的といえます。調査研究や資料収集、整理・保管は、この教育普及のための基礎的作業なのです。同時に、みなさんから見れば、この活動こそ博物館の仕事の全てとなるわけです。

展示をはじめ、私たちが講座とか体験学習と呼んでいるものが教育普及活動のおもなものです。

当然のことですが、博物館になくってはならないのが展示です。博物館だけではなく、持っている「もの」を他の人に見せるということは、多くの人がやっていることです。和室の「床の間」に書画を掛けたりすることを考えると、床の間は日本の古典的博物館と言えるかも知れません。この「床の間博物館」と今の博物館の違いは、今の博物館が「もの」を教育のために見せるところにあります。言葉をかえれば、「もの」が無言で語ることを聞きやすくするのです。さて、そうは言ったものの、展示とみなさんの間には会話は生まれません。いわば一方通行なのです。この一方通行を補うため、郷土の森では映像によるQ & Aコーナー等を用意しています。しかし、それでも「もの」が語ることを理解するのは難しいことです。その手助けをするのが学芸員です。ですから、みなさんには私た

ち学芸員をおおいに利用して欲しいのです。

同様に、一つのテーマに絞ってお話を聴く講座や実際に体を使う体験学習も、展示を補足していくものです。展示室には、クワやトウミなどの農具が展示してありますが、実際の使い方を知らない人もいることでしょう。郷土の森では、この春から「こめっこクラブ」と題して水田学習を行い、こうした道具を実際に使ってみようと思っています。体験を通して、道具の使い方だけでなく、稲の成長の仕方など様々なことを学べることと思います。

#### —— 実際の活動 ——

こうした教育普及活動は、先ほども言いましたように、他の3つの活動の上になりたつものです。ここでは一例として、一つの「もの」が展示される過程を簡単にみてみましょう。

学芸員が畑で土器のかけらを拾い、博物館に持ち帰りました。この土器のかけらは本来どんな形をし、いつ、どこで、だれがどのように作り、使ったものなののでしょうか。まず、こうした事柄を調べる必要があります。同時に、この資料の実測図あるいは写真や拓本をとり、調べたことをカードに書きこんだり、もとの形に復元する作業を行います。こうしてようやく、この土器は、解説ラベルとともに展示されるのです。

しかし実際には、博物館で持っている資料の全てを展示できるわけではありません。博物館の展示は教育のためのものですから、ただ単に「もの」がたくさんあれば良いわけではないのです。展示されない「もの」は収蔵庫に大切に保管され、研究の資料として活用されたりしながら、将来の展示のチャンスを待つわけです。(F)

# カメラアンクル

——事業日誌抄——



## ▲12/20 もちつき大会

民家のカマドもたいてみました。とってもおいしかった。君はいくつ食べられたかな。

## 2/20 星空観測会

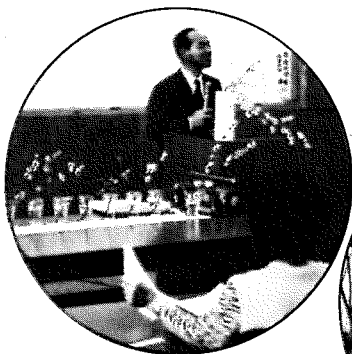
寒さなんか何のその。見つめる先は宇宙のかなたです。



むさしのの郷土の森に梅の春  
ひろし



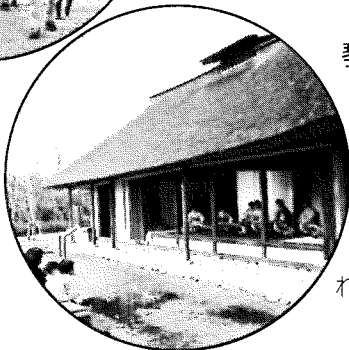
## 観梅句会



## 梅講座 I～III



## 琴・尺八 演奏会



琴の音や  
梅の香のせて  
わらべ唄 武造

## 野点茶席



紅梅や野点の席の  
華やぎて 久美子

あれこれ

## ＝梅はどこからきたか？＝

わってきたらしいとされています。



郷土の森園内には、まだ種類によってなごりの花を咲かせている梅があります。2月には梅まつりも開催され、青空の下、紅白の梅花を觀賞しながら野点のお茶や琴の演奏に集う人達でにぎわいました。

ところでこの梅ですが、一体どこからやってきたのでしょうか。大分県や宮崎県にもともと自生していたとする説もあるようですが、実際は弥生時代以後に中国から大陸文化とともに伝

来したとされています。弥生時代以降の遺跡から梅の“遺体”（主に核）が出土するのに、縄文時代からは今のところ出土していないこともその説の根拠のひとつです。また日本原産の植物にはサクラ、ツバキ、ナシなどのように桜(いん)、椿(ちん)、梨(り)と中国音には関係ない日本固有の呼び名がありますが、中国から来た植物は、ピワ(枇杷)やブドウ(葡萄)のように漢字の中国音そのまま、あるいはそれに近い呼び名をもっており、ウメ(梅)もこれらと同じ部類に属しています。

文献からみるとどうでしょうか。植物としての梅の字がはっきり現れた初見は「懷風藻」(751年)で、「古事記」(712年)や「日本書紀」(720年)にはブドウ、モモなどが出ているにもかかわらず、梅はないようです。「万葉集」では約160種類の植物が詠まれ、そのうち梅は第2位を占める程多く詠まれています。奈良時代、舶来植物として、いかに貴族の関心を集めていたかがうかがえます。(N)

### インフォメーション

#### ■ハッピーバースデー郷土の森

4月4日、郷土の森は満1歳になります。あるむぜお al museo はイタリア語で、“博物館”で“博物館にて”という言葉です。郷土の森があなたの素適な博物館に育ちますように。

#### ★星空観測会

寒さを気にせず夜空を仰げる季節になりました。プラネタリウムで覚えた星を探してみましょう。4月16日(土)、5月21日(土)、19:00から。

#### ●こめっこクラブ

園内に造成中の田んぼができました。カヤ薺き民家と農作業、ほんの少し前の日本の基本の暮らしを、米作りを軸にいろいろな角度から体験してみようとする子供たちを募集します。小4～中3。5月から。

#### ●歴史講座—史料講読会—

1年間コツコツと近世史料を読む練習をしてきました。会員の熱心さで4月からは月2回に、内容も古文書が多くなる予定です。若干の欠員募集をいたします。

#### ●森のお話会

民家のイロリ端はかつて子供たちがいろいろな話を聞きながら心の糧を貯えた場所。月に一度ですが、園内の民家をまたそういう場として息づかせようと思います。昔話や笑い話……どうぞ聞きにおいでください。5月から毎月第2土曜日、午後3時から。

#### ■二期工事計画

130,000㎡の敷地を有する園内ですが、そのうち約30,000㎡は未だ造成中で来園の皆さんにご迷惑をおかけしています。来年春までに、商家と郵便取扱所などの復原建造物の他、野外ステージとしても使える芝生広場や水遊びの池などが完成する予定です。また楽しい利用の仕方を練ることにしましょう。

あるむぜお 第3号

発行年月日 昭和63年3月20日

発行 府中市郷土の森

〒183 東京都府中市南町6-32

☎0423-68-7921